

燃えよ 剣

司馬遼太郎

文藝春秋



燃えよ剣

1998年9月20日 第1刷

著者 司馬遼太郎

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03 (3265) 1211 (代)

定価はカバーに表示してあります

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取

替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

© Midori Fukuda 1998

Printed in Japan

ISBN4-16-317950-X

燃えよ 剣

司馬遼太郎

文藝春秋

ISBN4-16-317950-X

C0293 ¥1238E

定価(本体1238円+税)



1920293012384



『燃えよ剣』は大長篇『竜馬がゆく』と並行して書き進められた。

『竜馬がゆく』は1962年6月から産経新聞に連載が始まり、同年の11月には『燃えよ剣』が「週刊文春」誌上に登場する。著者39歳、直木賞受賞から3年目。明治維新への重要な役割を果たした坂本竜馬を描く一方で、それを阻む側の土方歳三を主人公にした小説を同時に執筆していたのは興味深い。当初、新選組にはいささか抵抗感があったそうだが、書くうちにそれが消え、書き終えたあとは「土方も近藤も、自分の浮世の知人のたれよりも親しいような感情をもっています」と著者は述懐している。

◀『燃えよ剣』執筆当時の著者

燃えよ剣

司馬遼太郎

文藝春秋

装　画　村上　豊
デザイン　木本百子

初出・この作品は、一九六二年一月から六四年三月まで「週刊文
春」に連載され、六四年三月と五月に二巻の単行本として刊
行された。

女の夜市

新選組局長近藤勇が、副長の土方歳三とふたりつきりの場所では、

「トシよ」

と呼んだ、という。斬るか斬らぬかの相談ごと二人きりのときは、

「あの野郎をどうすべえ」

と、つい、うまれ在所の武州多摩の地言葉が出た。

勇は上石原、歳三は石田村の出である。どちらも甲州街道ぞいの在所で、三里と離れていない。初夏になれば、草むらという草むらが蝮臭くなるような農村だった。

さて、「トシ」のことである。

トシという石田村百姓喜六の末弟歳三の人生が大きくかわったのは、安政四年の初夏、八十八夜がすぎたばかりの蝮の出る季節だった。

例年になく暑かった。

この夕、歳三は、村を出るとまっすぐに甲州街道に入り、武蔵府中への二里半の道をいそいでいた。

浴衣の裾を思いきりからげている。

背がたかい。肩はばが広く、腰がしなやかで、しかも腰を沈めるように歩く。眼のある者からみれば、よほど剣の修業をつんだ者の歩き方だった。

顔は紺無地幅広の手拭でつつみ、頬かぶりのはしを粹に胸まで垂れている。

洒落者であった。

手拭一本でも自分なりに工夫して、しかもそれが妙に似合う男だった。

洒落者といえど、まげが異風であった。百姓のせがれらしく素小鬚という形にすべきところだが、村

でもこの男だけは自分で工夫した妙なまげを結っていた。それが大それたことに、武家まげに似せてある。

この変りまげについては、

「分際（ぶんさい）を心得ろ」

と、名主の佐藤彦五郎から叱られたことがあったが、歳三は眼だけを伏せ、口もとで笑っていた。

「なあに、いずれは武士になるのさ」

といった。

その後もまげをあらためなかったが、ただ紺手拭で頬かぶりをするようになった。だから村では、

「トシのお目こぼし鬘（まげ）」

と悪口をいった。歳三の家と佐藤家とは親戚なのである。親戚だから、名主もこの異風を目こぼしする。そういう意味である。

しかし頬かぶりよりも、頬かぶりの下に光っている眼がこの男の特徴だった。大きく二重（ふたえ）の切れながの眼で、女たちから、「涼しい」とさわがれた。

しかし村の男どもからは、

「トシの奴の眼は、なにを仕出かすかわからねえ眼だ」

といわれていた。

まったく、この男はなにをしでかすかわからなかった。

いまも、街道を歩いているなりはただのゆかたがけだが、その下にはこっそり柔術の稽古着（けいこぎ）をきている。

宿場のはずれに出たところ、野良がえりの知りあから、

「トシ、どこへ行くんだよう」

と声をかけられたが、だまっていた。

まさか女を強姦（ごうかん）しにゆく、とはいえないだろう。

今夜は、府中の六社明神（ろくしゃめいじん）の祭礼であった。俗に、くらやみ祭といわれる。

歳三のこんたんでは、祭礼の闇につけこんで、参詣の女の袖をひき、引き倒して犯してしまう。その

ときユカタをぬいで女が夜露にぬれぬように地面に敷く。その上に寝かせる。着ている柔術着は、女の連れの男衆と格闘がおこった場合の用意のつもりだった。

歳三だけが悪いのではない。

そういう祭礼だった。

この夜の参詣人は、府中周辺ばかりでなく三多摩の村々はおろか、遠く江戸からも泊りがけでやってくるのだが、一郷の灯が消されて浄闇の天地になると、男も女も古代人にかえって、手あたり次第に通じあうのだ。

いよいよ下谷保をすぎたあたりから、府中の六社明神をめざしてゆく提灯のむれが、めだつてふえはじめた。

江戸の方角に、月があがった。

月の下をどの男女も左手に提灯をもち右手に青竹の杖をひいて異常な音響をたてながら押し進んでゆく。蜷の出る季節だから、青竹のさををササラに割

り、道をたたいて蜷を追いつらしながら歩いてゆくのだ。

歳三も、青竹をもっていたがこの男の杖だけはただの青竹ではなく、節をぬいて鉛をながしこみ、ずしりと鉄棒のように重かった。

蜷をおどすよりも人間をおどすほうに、これは役に立つ。

この近在では、歳三のことを、

「石田村のバラガキ」

と蔭口でよんでいる。茨垣と書く。触れると刺す例の茨である。乱暴者の隠語だが、いまでも神戸付近では不良青年のことをバラケツというから、ひょっとするとこのころ諸国にこの隠語は行なわれていたのかもしれない。

歳三が府中についたのは戌ノ刻のすこし前であった。

府中の宿六百軒の軒々には、地口行燈に蘇枋色の提灯がつるされ、参道二丁のけやき並木には高張提

灯がびっしりと押しならんで、昼のように明るい。

いわば、女の夜市よいちなのだ。

歳三は、女を物色してあるいた。ときどき、同村の娘や女房連とすれちがってむこうから袖をひかれたりしたが、

「よせ」

と、こわい眼をした。歳三にはふしぎな羞恥癖しゆうちへきがあつて、同村の女と情交したことは一度もなかった。同村だと、いずれは露あらわわれるからだ。だから、

「トシはかたい」

という評判さえあつた。歳三は、情事のことでは囁ささまれるのを極度に怖れた。

理由はない。

一種の癖だろう。だから、

「トシは、猫だ」

ともいう者があつた。なるほど犬なら露骨だが、

猫は自分の情事を露わさない。そういえば、歳三は情事のことだけでなく、どこかこの獐猛ぢやうもうで人になつきにくい夜走獸に似ていた。

もっとも、歳三が同村の女と情交まじわりたくないの理由はあつた。土百姓の女には、なんの情欲もおこらなかつたのだ。

(女は、身分だ)

と考えていた。美醜ではない。それが歳三の信仰のようなものであつた。

自分より分際の高い女に対しては、慄おそえるような魅惑を感じた。こういう性欲の型をもつた男も少なかろう。

たとえば、去年の冬、この男がある生娘きむすめと通じたのもそれであつた。

女は、八王子の大きな真宗寺院の娘で、その宗旨のならわしとして、娘はその門徒たちから、

「お姫さま」

とよばれていた。歳三はただそれだけを耳にし、

娘をまだ見ない前から、その娘と寝たいと思った。

歳三はこの娘と通じるために、わざわざ二里はなれた八王子に数日逗留した。

ついでながら、歳三は、八王子付近の住民から「薬屋」とよばれていた。

このころ、この男は薬の行商もしていたのだ。

もつとも歳三の家は、農家ながらもこの一郷では、「大尽」とよばれているほどの家だから、薬の行商をしなくとも暮らせるのだが、家に、「石田散薬」という、骨折、打身に卓効ある家伝の秘薬がつたわっている。

原料は、村のそばを流れている浅川河原でとれる朝顔に似た草で、その葉に、トゲがあるそうだと。その草を土用の丑の日に採り、よく乾して乾燥させ、あとは黒焼きにし、薬研でおろして散薬にし、患者にそれを熱燗の酒で一氣にのませる。奇妙なほどにきいた。のちに池田屋ノ変のあと負傷した新選組隊士に歳三がひとりひとりに口を割るようにして飲ま

せてみたところ、二日ほどで打身のシコリがとれ、骨折も肉巻きがしなかったといわれる。

その家伝「石田散薬」の行商をして、歳三は、武州はおろか、江戸、甲州、相州まで歩いた。それがこの男の年少のころからの剣術修業法で、町々の道場に立ちよっては骨折、打身の薬を進呈し、そのかわり一手の教えを請うた。

当時歳三がしばしばそのあたりまで足をのばして逗留した甲府桜町に道場をかまえる神道無念流の梶川景次などは、のちに京の新選組のうわさを耳にし、「土方歳三とは、あの武州の薬屋か。あれならばそれくらいのことではやるだろう」といったという。

八王子の真宗寺院に入りこめたのは、薬売りという便宜があったからである。

寺の名を、専修坊といった。

院主は歳三が気に入って、寺の納屋にでもとまって数日近在に売り歩くがい

い」

といつてくれた。娘の姿は見なかったが、昼のあいだに寺の建物、庭の様子をくわしく調べておき、娘の居間が、この寺で客殿とよばれる小さな数寄屋造りの一室であることも知った。

翌日、はじめて娘の姿をみた。娘は、魚に餌を与えるつもりか、庭の池のふちに腰をおろして朝の陽をあびていたが、通りかかった歳三に気づいて顔をあげた。

不審な表情で、眉をよせた。

むりもなかった。

紺手拭で頬かぶりをし、絹の縞しまの着物に献上の帯をしめているあたりはどうみても名主の総領息子の様子だが、それが威勢よく尻からげをしている。しかも股引ももひきをはき薬箱をかついでいるところだけを見ればどうやら行商人としか思われない。ところがそうとも思われないのは、この若者が、剣術道具をかついでいる点であった。

こんな、ちぐはぐな男をみたことがない。それがふしぎと、この眼の涼しい男に似合っているのである。

(どなたかしら)

娘は、まじまじと見た。

歳三の見るところ、娘はさして美しくはなかったが、小柄でおとなしそうなところがかれの好みに合う、とおもった。

が、一礼もしなかった。

分際の高い女は好きだといつても、この男は女に頭をさげて愛嬌をふりまくのは好まなかった。

ただ、二、三步近づいて、

「いずれ」

と、だけいった。

いずれなにをするのか。

娘が訊きこうと眼をあげたときは、歳三は背をみせて山門のほうに去っていた。

その夜、子ノ刻ねこく、歳三は娘の部屋の雨戸にゆばり

を流して、音もなく開けた。武州多摩の村々の若者は、娘をよばうときにこの法をつかう。

女が、二人寝ていた。

ひとり娘の乳母で、歳三が枕もとで寝息をうかがうと、正体もない。

つぎに、娘の寝息を嗅いだ。低く小さくまろやかで、これも正体がなかった。

歳三は、ふとんの裾にまわった。ふとんをそとはぐると、娘の半身が出た。

両方の親指を、歳三はつまんだ。つまみあげた。両脚を親指だけでつまみあげるのはひどく重いものだが、娘の目をさませないようにするためには、それしか法ののないものだということを歳三は知っていた。

やがて、娘の両脚は裾を割って無心にひらいた。死体のように知覚がない。

娘が目をさましたときは、すでに異変がおこってしまったあとだった。

ところが歳三にとって意外だったのは娘が騒がなかったことだった。ただひたすらに体を固くしているほかは、吐息さえもこらえ、声もたてない。

——いずれ。

と歳三がいった意味を、娘はすでに知っていたのだろう。むしろ、この見映えのいい旅の若者が忍んでくることを、ひそかに期待していたのかもしれない。若者が娘をよばうことは、この郷ではめずらしい事件ではない。

娘の意外な落ちつきをみて、

(これがお姫さまか)

と失望したのは、歳三のほうだった。その翌日、寺の裏手にひろがっている桑畑にうずもれ、野良着をきて桑つみをしているのをみて歳三はさらに失望した。

(ちがう。——)

とおもったのは、かれが想像していた娘ではなかったのだ。野良着をきて桑臭くなっている娘ならか

れの村にもいる。わざわざ八王子くんたりまで来ることはなかったのである。この男は、その夕、八王子を発ったきりその後ついにこの専修坊に立ち寄りなかつた。

すこし異常だが、この挿話は、それほどかれが分際（ぶんぎ）の貴い女へのあこがれがつよいことを証拠だてている。

分際（ぶんぎ）が貴い、といつても、武州三多摩の地は、幕府領、寺社領ばかりの地で、武家がいなかった。村には馬糞くさい百姓娘ばかりいる。やむなく、歳三は、数年前に府中の六社明神の鈴振り巫女（みこ）の小桜（こさくら）を手なずけて、ときどき彼女の住む社家（しゃけ）のお長屋へ忍んでいた。

今夜の祭礼には小桜も巫女舞（みこまい）に出るためにおらく会えまいとおもつたが、神事の果て（は）る払暁（は）には、お長屋に忍んでみるつもりでいた。

そのあいだに、女を物色する。目ぼしい女がおれば、この祭礼の俗風として灯の明るいうちに当りを

つけておき、闇になるとともに寝るのである。

が、おもわしい女はいなかつた。

（江戸からきた武家娘がいい）

と、歳三は軒行燈（のきあんどん）の下を歩き、境内の林のなかを歩きまわつた。

（居ねえか）

もう一刻（ひととき）も、物色している。が、さすがにこんな猥雑（わいさつ）な祭礼に江戸の旗本の子女が来るはずがなかつた。

もつとも参詣人こそ猥雑だが、当の六社明神（大國魂神社）は古来武州の総社で、祭礼の格式もきわだつて高く、江戸の諸社の神職などは、この祭礼の下役人になつて働かされる。それほど社格が高い。（仕様がねえな）

歳三は、帰ろうかと思つた。もつとも物色するうちに何度か、小百姓の女房風の女から囁かれたが、

見むきもしない。

そのうち、社殿の森のあたりで祭礼役人の矢声^{やこゑ}がきこえ、神輿^{みこし}の渡御^{とぎぎ}をつげる子ノ刻の太鼓がひびきわたったかとおもうと、万燈が一せいに消え、あたりは闇になった。

浄闇である。

ただ星だけが見え、数万の群衆は息をつめて、男神^{かみ}の神輿^{みこし}が女神のもとに通うのを待つ。男女の懺合^{せんごう}はこのあいだに行なわれるのである。そのことも、六社の神を賑^{にぎ}わす神事であると参詣人たちは信じていた。

だから、男女は影だけをかさね、声ひとつ立てない。神威をけがすことをおそれた。立ったまま犯される生娘もいたし、群衆の足もとに押し倒される人妻もいた。しかしどの女も齒をくいしばっても声を洩^はらさない。

歳三のこの夜の幸運は、万燈が消えたと同時に、かれのそばに女がいた。

なぜその女が、歳三のそばまで寄っていたかわからない。

場所は、群衆のひしめいている参道ではなく、境内の森のなかであった。もともと暗かったから灯のあるときにも女の影に気づかなかったし、女のほうもそうだったろう。抱きよせてみてから、女が、ひどく手ざわりのやわらかな絹を着ていることを知って歳三はおどろいた。

（何者だろう）

手さぐりで衣裳^{いしやう}を探ると、四枚の比翼^{ひよく}がさねに替^{かわ}り裾^{すそ}といったもので、この近郷では名主の子女でも用いない。それに匂い袋を懷中に秘めているらしく、歳三などがかつて嗅いだことのない芳香であった。

「そなた、何者だ」

ついに禁を破って、囁いた。

が、女は、これが神事であると信じているのか、だまってかぶりを振った。

「いってくれ」

「申せませぬ」

明るい声であった。それに、つよい武州の田舎こ
とばでなく、語尾がやわらかであった。

「そなた、かまわぬか」

「かまいませんぬ」

歳三は、草の上に女を押し倒し、はじめて女を知
ったときの眩惑めくらむような思いで、女を抱いた。この
女を抱いたことがやがて歳三にとって自分の新しい
運命まで抱いてしまったことになろうとは、むろん
このとき気づかなかつた。

(わからぬ)

女の体は、すでに男を知っていた。そのくせ、衣
裳のぐあいは、娘なのである。

歳三は、抱きしめながら女の帯の間から錦にしきの袋に
入った懐剣をすばやくぬきとった。これさえあれば、
あとで身分が知れようと思つたのだ。

女はそれと気づかず、やがて草の上で着くずれ
をなおし、闇のなかに消えた。

神事がおわり、夜が明けはじめたころ歳三は、巫
女屋敷のなかの小桜の長屋に忍んでいた。

「これだ」

と、例の懐剣を見せた。

刀身は海藻ひじき肌はだの地肌じはだの立ったみごとなもので、銘
は則重のりしげとある。越中えちゅう則重であるとするれば、世にいく
つとないものだ。

しかし小桜は、刀身などに見むきもせず、錦の袋
をとりあげて行燈にすかしてから、

「あんた、このひとと？」

とおどろいてみせた。

「たしかに、まぐあつたの」

「そうだ。まだおれのからだに、あの匂い袋の移り
香が残っている」

「この紋をご存じ？」

と、小桜は、赤地の錦に金糸で縫いとられた五葉ごよう
菊の紋をつまんでみせた。

「知らねえ」

「この府中の官司猿渡家の裏紋よ。あんた、とんでもないことをした。この懐剣の袋には、あたしは見覚えがある。当代從四位下猿渡佐渡守さまの御妹君で、お佐絵さまのものよ」

「そうか」

歳三は、袋をとりあげ、食い入るようにその五葉菊の紋を見た。

六車斬り

なるほど、この男の恋は猫に似ている。

その後、歳三は、人知れず、府中の六社明神の神官猿渡佐渡守屋敷にしのびこんでは、蚊帳のなかでひとり臥ている佐絵と狎れた。

たれも知らない。

知られることを極度に怖れた。その点、歳三は猫

に似ている。

が、さらに風変わりなのは、佐絵に対しても、何村のたれ、とも明かさない。猫以上の秘密主義であった。ただ、はじめて忍んできた夜、佐絵をぞんぶんに抱いたあと、

「これから、歳、とよんでくれ」

とだけ云い残して帰った。それがひどく羞かしそうで、女の寝間をもとめて猿渡屋敷に夜陰忍びこんでくるほどの豪胆さとは、およそ別人のような感じを佐絵はうけた。

(妙な男だ)

かと思うと、ひどくものやさしいのである。

最初この男が蚊帳のなかに忍びこんできたときなど、起きあがろうとした佐絵の口をいきなり掌でふさぎ、

「先夜、祭礼のときの男だ。あの夜は、ありがとう。あなたの忘れものをかえしにきた」

と耳もとでゆっくりささやき、例の赤地錦に入っ